

大井第4公園の設計について

誌名	造園雑誌
ISSN	03877248
著者名	木村,弘
発行元	日本造園学会
巻/号	44巻1号
掲載ページ	p. 40-43
発行年月	1980年8月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



■学会賞受賞者業績要旨■

大井第4公園の設計について

木 村 弘*

The Design for the 4th Ohi Park

by Hiroshi KIMURA*

はじめに

今年の日本造園学会春季大会において、「大井第4公園ほか一連の造園設計」にたいする「昭和54年度造園学会賞(計画設計作品部門)」受賞の栄に浴し、喜びにたえません。と同時に、これは私共への賞というよりは、造園設計界全体への賞であり、我国における造園設計活動が社会的評価を得つつあることの証左とうけとめ、これまで以上に設計活動を推進すべき、設計水準を向上すべき責任を痛感するものです。ここに表記作品の概要を述べて、大方のご批評ご教示を給わりたい。

「東京都海上公園計画」は約30箇所におよぶ公園群とこれらをつなぐ緑地とによって臨海地帯に緑のネットワークを形成し、埋立地に自然を回復し、臨海レクリエーションの場をつくり出そうとするものであるが、大井第4公園は、この公園緑地系統のうち西部地域における中核的公園として位置づけられるものである。

1. 敷地周辺地域の概況

東京港埋立地計画は面積3000haにおよび、これを東西に貫通する東京湾環状道路(100m)道路によって沖がわ地域と陸がわ地域とに分けられ、沖がわは主に物流サービスや既存市街地再開発移転用とされ、陸がわは主として住宅や商業・業務用地等に当てられている。大井第4公園の位置する大井埠頭その1地区は外貨埠頭・運送等港湾関連施設・流通業務基地・市場等物流関連施設用地の割合が高く土地利用計画では利用土地約520haの70%を占めている。そのほかの土地利用としては商業文化施設、住宅供給処理施設等がある。人口計画は就業人口48000人、夜間人口25600人となっている。公園緑地、交通施設等公共公益施設は、目下盛んに整備されつつあり、各種業務の操業も始まっている。

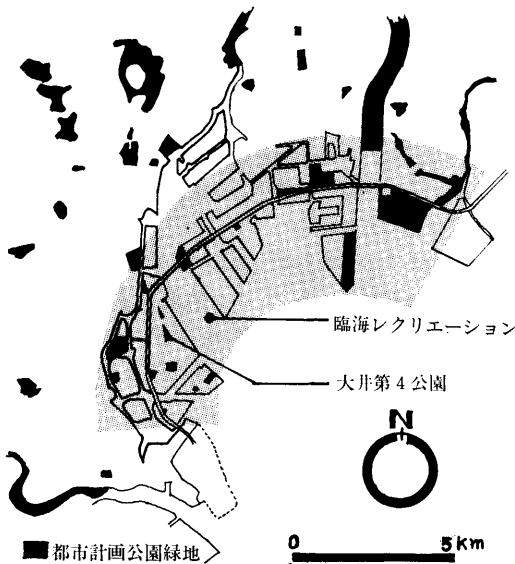


図1 臨海公園緑地パターン

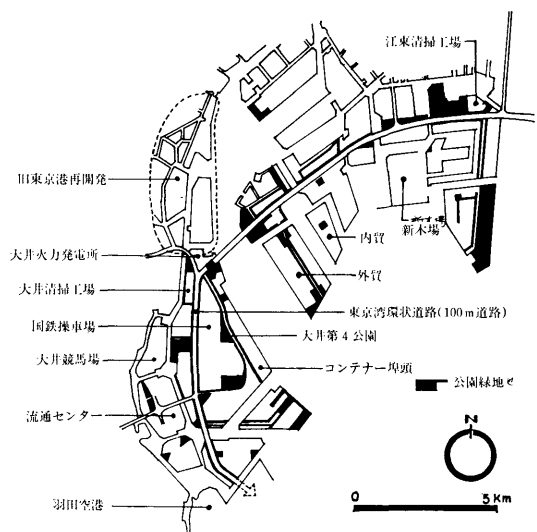


図2 東京港周辺地域の整備

* 昭和13年東京生まれ 昭和37年千葉大学園芸学部卒 昭和46年同大学院卒 現在 株式会社総合設計研究所代表

2. 敷地現況

2-1 大井埠頭その1地区のほぼ中央に位置し、面積約5haの三角形の土地で、隣接地は西がわに国鉄新幹線基地、東がわには50m道路をはさんで外貿コンテナ埠頭が立地し、南は流通業務施設地である。

2-2 公園利用者は隣接地域からの利用に加えて、より広範囲から海上公園系統全体のレクリエーション利用の一環としての利用が想定される。

2-3 気候は、年平均気温14.5℃、年降水量約1600mm、風向は夏期に南、冬期に北の風が多く夏期の潮害が生ずるおそれがある。

2-4 地形はきわめて平坦だが敷地の一部に残土の集積があり、高みからは港湾の景観のほか富士山や房総半島の山並が遠望できる。

2-5 地盤は全般にヘドロ層があり、不透水性かつ軟弱である。土壌は微アルカリ性・還元的で通気性がわるい。化学的には磷酸に富むが曹達等の塩類が過多で塩素も多いなど植栽には不向きであり、客土等の土壌改良が必要であった。

2-6 交通網は幅員50mの道路に接しバス路線があるなど自動車交通に恵まれている。また、東京モノレール大井競馬場前駅から新幹線基地を横断して1.4kmの位置にあり、跨線橋でアプローチできるが地上高約5mの高さであるから、公園への導入には連絡橋を設ける必要があった。

2-7 供給処理施設は上水・下水道が整備されているほか、工業用水道（中水道）が計画されており、水資源活用の意味から中水道水の活用をはかりたい。電気は高低圧とも受電可能であった。

3. 設計方針

東京都海上公園計画の一環として緑豊かなオープンスペースを回復し、潤いのある港の景観をつくり、臨海レクリエーションの拠点にすることを目的にして次のような基本方針により設計した。

3-1 眺望地点を設け、視覚的に海と都民とのつながりを回復し、親しみのある港の景観をつくる。

3-2 樹林によって緑陰と生物の棲息地を供給する

3-3 内水面を導入して憩いの場を形成し、多様な生物相の回復をはかる。

3-4 地形の変化により景観にダイナミズムを与えるとともに土中水分の移動をうながして土壌を改良する

4. 基本構造

公園の基本構造は、最大の寄付き位置に広場ゾーン、敷地中心に眺望ゾーン、北部に水辺ゾーン、周囲に環境保全ゾーンを設定した。寄付き位置は敷地の三隅に設定した。築山と池を築き、築堤して園内環境を改善した。

5. 施設と配置計画

広場ゾーンは三段に分けて階段で結んだ広場と、築山とのコントラストを強調したサンクンガーデンを配置し壁泉水階段噴水等を配置した。

眺望ゾーンは築山とし展望広場・園路・植栽地とする。築山の土は建設残土を利用し、コンテナ埠頭を越して海面の見える限界以上高く、力学的に盛土し得る高さ以下であり、かつ、勾配は植栽上無理なく斜面園地としての利用も可能なるよう1/2.5として計画し、種々検討の結果抑え盛土を行うことにより山の高さをAP+21.4

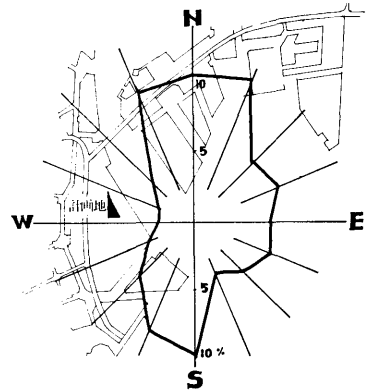


図3 風配図(全年)

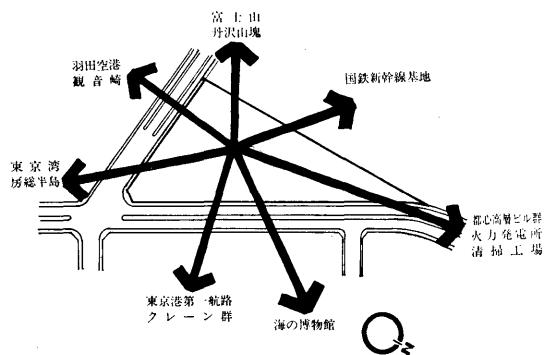


図4 周囲の景観要素

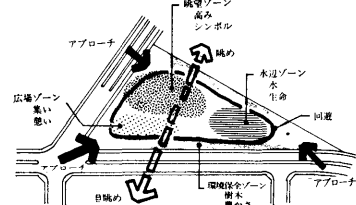


図5 基本構造

mにすることができた。この場合抑え盛土は築山の形状に変化を与える効果を生じたが、山麓部分に平地が乏しくなったことは否めない。

水辺ゾーンは自然風の池を中心にして、周囲をめぐる園路や四阿・植栽等を配置した。池は現地盤を約2m掘下げ調整池を兼ねて雨水を溜めたものである。

環境保全ゾーンは敷地周囲に築堤したうゑに樹木を密植するものとした。

6. 植栽計画

計画上イメージした植栽景観は築山と築堤の大半を樹林化し、樹林のなかに広場と池とを取り込むもので、広場や園路の周辺は落葉樹の軽快な植栽地とするものであるが、植物に対する環境圧の厳しい当地ではこのイメージを一気に造り出すことは困難であるために、当面は環境圧に耐えるための基本的樹林を形成することに主眼を置き、また築山の物理的安定性も考慮して植栽し、将来的に補植移植間伐等により逐次イメージに近づけるものとした。

配植形式は衝風に耐潮性樹木を比較的高密度に林内への潮風侵入を低減するよう配植し、その背後に耐潮性の小さい落葉樹等を配植した。築山は潮風のほかに乾燥しやすいことと、法面の安定をはかるためにクロマツの幼木を主体にした植栽とし、アクセントにやや大ぶりのクロマツを点在させた。植栽地の地被はホワイトクローバーとし窒素の供給をはかった。

土壌は客土により改良したが、経済的制約もあって植込地は50cm厚、芝生地は20cm厚とし、基盤土壌と客土との境は両者を混合した。客土した地表面にはバーク堆肥を敷込みマルチングを兼ねた土壌改良とした。

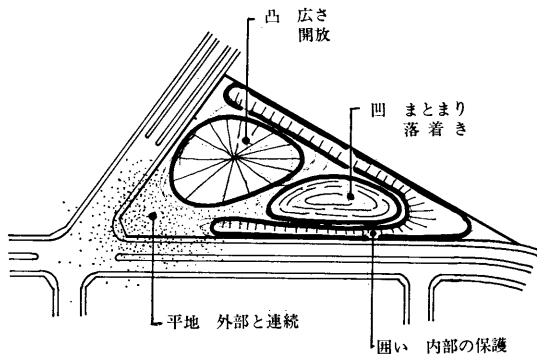


図6 空間構造

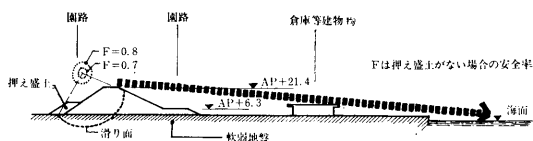


図7 築山の構成

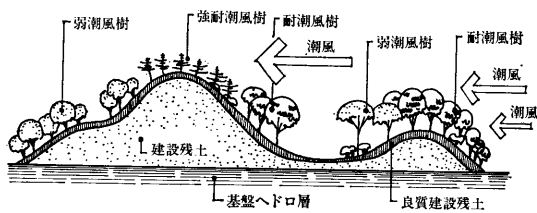


図8 植栽形式

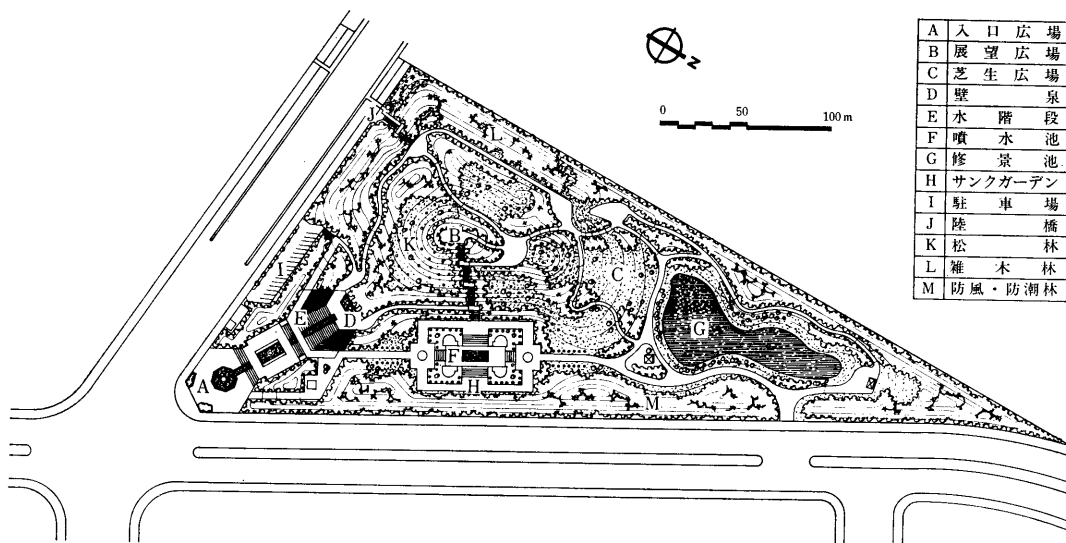


図9 計画平面図

おわりに

工事が終了してみると計画時点での考えかたの基本は貫かれたとは思ふものの、デテールの組立てや処理、色彩、材料選定などにつめきれていない点が多々あり、また植栽については環境圧を意識した点が大きく影響して半完成の段階であり、工作物の完成度合いとの間にアンバランスが目立っており、これら諸点が設計者としておおいに心残りである。今後の造園設計のありかたは、工事以前の段階にとどまることなく、工事そのものはもちろん将来の維持管理についても何らかのかかわりを持つことによって、設計対象の作品を真に利用者と融合したものとし、完成した造園作品に近づける必要があるのではなからうか。また、そのための方策を見出すべきだと考える。

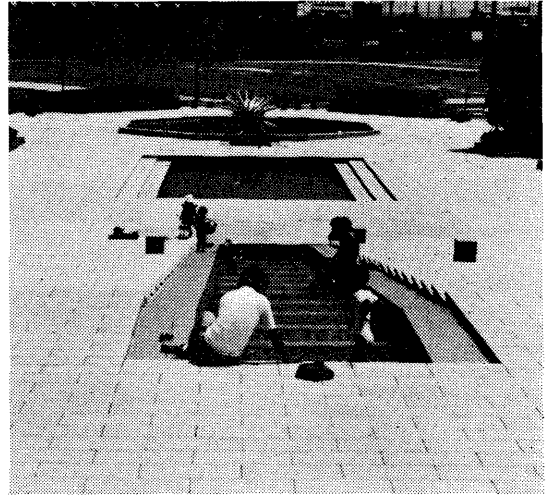


写真1 カ ナ ー ル

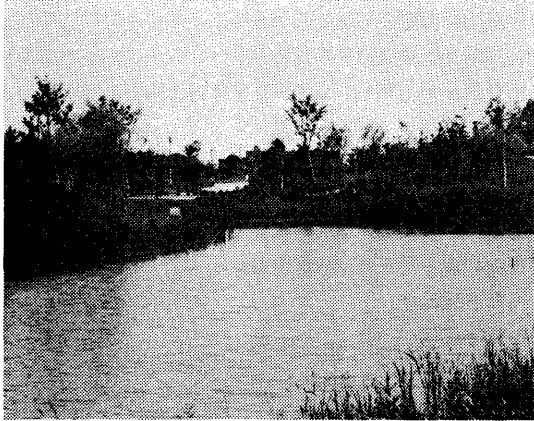


写真2 修 景 池

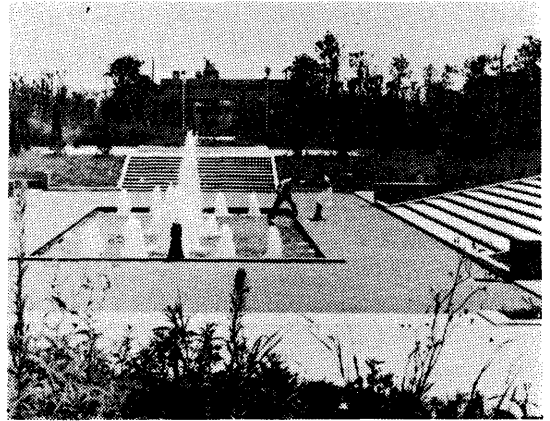


写真3 サ ン ク ガ ー デ ン

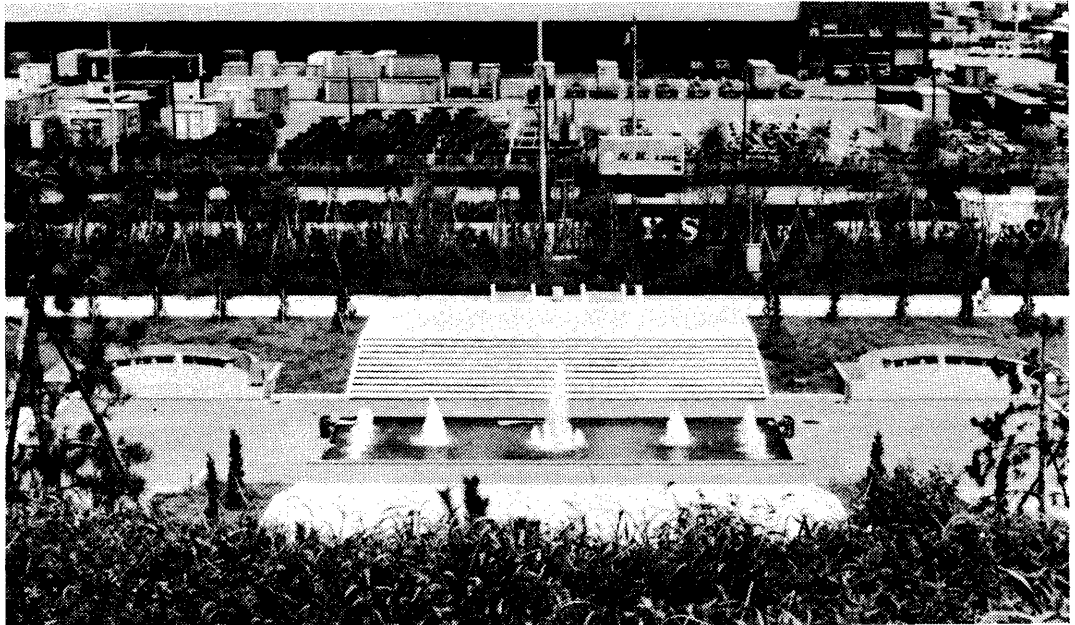


写真4 展 望 台 よ り